

シリーズ 社会文化的アプローチ

学習活動の理解と変革のエスノグラフィ

社会文化的アプローチの実際

石黒広昭 編著

北大路書房

はしがき

本書は社会文化的アプローチへの誘いの本である。「社会」、「文化」ということから、しばしばその立場は個人心理に対する社会や文化の重要性を考慮する立場と解されるようだ。人と環境という二項図式においては環境中心であり、内的なものとの外的なものという対立においては外的なものを重視すると。このような理解において、比較文化研究は「文化」や「社会」を独立変数として扱い、それに従属するものとして個人の認知等の精神機能を扱ってきた。多様な「文化」や「社会」に対応した人間心理の変動を明らかにしようというのである。社会文化的アプローチはこうした旧来からある比較文化研究の流れに位置づくものではない。人にとって「社会」や「文化」が重要であることはいうまでもない。問題は、その「社会」や「文化」のとらえ方である。社会文化的アプローチは社会から乖離した人を想定しない点でラディカルである。たとえば、この立場からすれば、「学力不振」はそのラベルを貼られている子どもに内在する問題ではないし、その子どもにとっての外的な処遇に還元されるわけでもない。「できなさ」を可視化する文脈がどのように構成されるのかがそこでは問われる。このようなスタンスは一見わかりにくいものであろう。しかし、本書PART 2の実践的研究を見ていただければその意味するところが容易に了解されよう。本書のような立場に馴染みのない読者はPART 2からPART 1にもどって全体を概観することを勧めたい。

本書にはもう1つの特徴がある。それは心理学を中心とした旧来の学習に対する見方に再考をうながす本であるということだ。私が心理学の世界にかかわるようになったころは、学習とは行動主義のそれでしかなかった。その後、認知心理学の興隆の中で、学習はコンピュータをメタファの中心として新しい理解がなされるようになった。しかし、どちらも個体中心主義であることでは共通性をもっていた。1979年に開催された第一回認知科学学会会議においてノーマン (Norman, D. A.) は当時の認知科学では「純粹認知システム」が想定されていること、そしてそれだけでは人間の認知はとらえることができず、「文化」的なものを考慮すべきであることを既に主張していた*。こうした発言は彼が個人的に生み出したものではない。その背後には当時ノーマンの同僚であったカリフォルニア大学比較人間認知研究所のコール (Cole, M.) らの研究が大きな影響を与えていた。実験室、学校教育というフレームの中でとらえ

られた認知・学習研究への反省から、その本質をとらえるために日常認知研究が盛んになった。1984年に出版された“Everyday cognition”[＊]と題された本の衝撃は今でも忘れられない。その後、社会的分散認知、状況論という大きな潮流がつくられていったが、それらの理論化に貢献してきたのがいわゆるヴィゴツキー学派の研究である。それはルリア（Luria, A.R.）を介してコールとワーチ（Wertsch, J.V.）からアメリカに、そして世界へと広がっていった。両者は文化的媒介（cultural mediation）を強調することによって個人と社会の二項対立を超え、先行世代の蓄積した経験の獲得過程としての学習を論じることの重要性を教えてくれた。本書の社会文化的アプローチという呼称は、文化歴史学派、社会歴史的アプローチ、活動理論、状況論などの総称として使われているが、そこでは学習は人を語るうえで中心的なテーマであり続けている。もちろん、そこでは豊かなフィールドリサーチに裏づけされた批判的な検討が加えられており、ヴィゴツキーのことが金科玉条とされているわけではない。本書もそれぞれの章を執筆した研究者のオリジナリティ溢れる理論的、実践的調査の成果を集めている。

本書の成立過程について一言述べたい。日本においてはソビエト心理学会がヴィゴツキー学派の研究を長く紹介していたが、なかでも天野清氏は終始一貫してその立場を貫き、ヴィゴツキー学派の紹介に果たしてきた役割は大きい。最近ではコールの著作の翻訳でも貢献されている。不確かな記憶をたどると、私が後に社会文化的アプローチと総称される研究を取り上げるきっかけになったのは、1980年代半ばに上野直樹氏が呼びかけて始まった活動研究会と称された研究会であったような気がする。そこで、後に日本における社会文化的アプローチをリードしていくことになる茂呂雄二氏とも出会った。また、当時、認知心理学を日本に紹介し、「学び」ということばに新鮮な意味を与え続けていた佐伯胖氏と出会ったことも幸いであった。佐伯胖氏が主催する研究会には同様の関心をもつ多くの人々が集まった。本書は「社会文化的アプローチの実際」と名づけられ、実践的な研究が紹介されている。こうして今や日本でも諸外国の理論を紹介するだけでなく、自らの足下にあるフィールドデータを丹念に見つめ、批判的なまなざしでそれらを吟味、発展させることが可能になった。本書にとって第一の貢献者はもちろん各章の執筆者であるが、その背後にはその研究を可能にしたこうした多くの研究者がいた。その意味では本書は執筆者だけで作ったものではないし、まして編者がひとりで作ったものではない。本書の企画に誘ってくれた佐藤公治氏、本書の構成において助言をくれた茂呂雄二氏、それに編集作業の労をとってくれた薄木敏之氏は言うに及ばず、ここでは一々名前を出さないが多くの方々の理論的、実践的作業が本書を支えている。まさに本書の成立それ自体に社会文化的な

学習活動の有り様をみることができる。編者としてはそうした方々の支援を無にすることがなかったかどうか気になるところであるが、その判断は読者にお任せしたい。

2004年 リラ咲く札幌にて

石黒広昭

★i ノーマン, D.A. (編) 1984 佐伯 胖 (監訳) 認知科学の展望 産業図書

★ii Rogoff, B. & Lave, J. 1984 *Everyday cognition : its development in social context*. Cambridge : Harvard University Press.

目次

はしがき

第1章	学習活動の理解と変革にむけて： 学習概念の社会文化的拡張	2
1	はじめに	2
2	学習とは何か？	3
	(1) 発達と教育	3
	(2) 社会歴史的経験の獲得としての学習	6
	(3) 社会的実践の一側面としての学習	9
	(4) 授業の中の学習	11
3	学習活動の媒介性	13
	(1) 文化的発達	13
	(2) 他者に媒介される学び	14
4	学習のヴィゴツキアン・エスノグラフィー	17
	(1) 行為に埋め込まれた学習にアプローチする	17
	(2) 発達のワーク研究	19
	(3) 「対象」をとらえる	21
5	社会文化的アプローチによって可視化される問題	23
	(1) 学習を社会的なものとしてとらえるわけ	23
	(2) 本書に収録された論文	24

PART 1 学習活動を理解する：学習研究への新しい視座

第2章	リテラシー学習のポリティクス：識字習得の政治性	34
1	リテラシーとは	34
2	読み書き能力の有無の基準	35
3	リテラシーの獲得	36
4	リテラシーの意味論	39
5	意識化	41
6	世界を読むということ	46
7	カリキュラムと文化戦争	49
8	学習とは、多様なものとの出会い	51
第3章	ヴィゴツキーの理論を拡張する：生命工学研究室での 日本人による社会的相互行為を事例として	53
1	はじめに	53
2	日本人の大人2人のデータ	58
3	議論	63

第4章 共変移：社会的組織化による知識とアイデンティティの増殖としての一般化71

- 1 現象を拡大する：知識増殖としての一般化 72
- 2 共変移の概念 74
 - (1) 側方変移 76
 - (2) 相互変移 76
 - (3) 包含変移 78
 - (4) 媒介変移 79
- 3 共変移を研究する 80
 - (1) 分析単位としての発達のカップリング 80
 - (2) 主導的活動と異時混濁性 85
 - (3) 水平的発達観 87
- 4 今後の課題 90

PART 2 学習活動の変革：学習活動の新しいデザイン

第5章 留学生のための日本語教育の変革：共通言語の生成による授業の創造96

- 1 はじめに 96
- 2 プロローグ 97
- 3 オードックスなアプローチの問題点 98
 - (1) 基礎段階のオードックスな日本語教育 98
 - (2) 教育内容の自己目的化 99
 - (3) 「本日の言語事項」をめぐる相互行為 100
 - (4) 知識の物象化 103
 - (5) 個体主義的で表象主義的な学習観 103
- 4 第二言語教育における新しい学びの経験の創造にむけて 104
 - (1) 第二言語学習者という行為主体と第二言語場面 104
 - (2) ZPDと言語発達促進活動 105
 - (3) 第二言語教育における教育的経験の構成について 107
- 5 自己表現中心の入門日本語教育 108
 - (1) 概要 108
 - (2) 授業の構想 110
 - (3) 各モジュールの授業の構成 111
- 6 新しい学びの経験をめぐる断章 112
 - (1) 相互行為の実践 112
 - (2) 日本語教室の共同体 114
 - (3) 共同体と成員と共通言語 114
- 7 相互行為の実践の記述 115
 - (1) 相互行為の実践としてのプロジェクト・ワーク 115
 - (2) 準備段階の活動 116
 - (3) インタビューの実施 117

- (4) ポスターの作成 121
- 8 結びに代えて 122

第6章 対話的関係の交渉と歴史としての「声」： ある脳梗塞患者の社会的機能の障害から考える ……129

- 1 病いによる自己の変容 130
 - (1) 違和感と怒り 130
 - (2) 家族：「第三者としての障害者」 131
 - (3) 「生物学的機能の障害」と「社会的機能の障害」 133
- 2 分析の視点 135
 - (1) 「声」と「特権化」 135
 - (2) 「特権化」の心理学的視点 138
 - (3) 「特権化された声」との関係 138
- 3 「声」の歴史性 139
 - (1) 新しく生まれた「声」：「ていねい語」 140
 - (2) 「ていねい語」の変遷 143
- 4 バフチンの視点からみてきたもの 146
 - (1) 対話的関係の交渉とその歴史 146
 - (2) 過程としてのアイデンティティ 149
- 5 終わりに 151

第7章 造形教育の変革：協働される創造と知 ……153

- 1 日常生活場面における子どものつくり表わす活動をとらえる 154
 - (1) 造形的活動に対する従来の視点：個人能力主義と文化決定論 154
 - (2) 子どものつくり表わす行為をどのようにとらえるのか 155
 - (3) 生活や遊びのできごとに埋め込まれたつくり表わす活動の観察と記述 160
- 2 つくり表わす活動の協働形成過程 162
 - (1) 初めて「書くこと」と「描くこと」 162
 - (2) 遊びの中でつくり表わされるものとできごとの協働形成 173
- 3 協働される創造と知 180
 - (1) 子どもの表現の成り立ちと学びの成り立ち 180
 - (2) できごとの協働形成過程と学びの臨床学 183

第8章 教師の学習共同体をつくりだす：コンピュータに 媒介された協調学習のデザインと介入 ……186

- 1 教師の学習共同体 186
- 2 コンピュータを用いた協調学習支援 188
 - (1) 研究背景 188
 - (2) 先行研究 189
 - (3) デザインと介入 190
- 3 活動システム 191
- 4 事例：教師の学習共同体としてのCSCL環境 192

(1)	交流学習研究会	193
(2)	Teacher Episode Tank	195
(3)	TET導入直後の活動システム	197
(4)	活動システムへの介入	200
(5)	教師の学習共同体としての活動システム	204
5	まとめと考察	206

引用文献	209
人名索引	224
事項索引	226